

はじめとした天気が続く今日この頃、みなさんいかがお過ごしですか。今年度第1号の図書館ジャーナルでは、この春下館一高に着任された先生方12名に ①印象に残っている本と ②教師以外でなりたかった職業についてお聞きしました。冷房の効いた部屋で、読書をして過ごすのもいいですね！

山田 伸一 教頭先生

① 三浦哲郎『鳥寄せ』

センター試験が共通一次試験と呼ばれていた頃、国語の問題としてこの短編が出題された。当時中学生か高校生だった私は、翌日の新聞でこれを読み、こんな小説が出題されるのかと衝撃を受けたのを今も覚えている。

② プロアングラ

理由は釣りが好きだから。でも、毎日釣りをやれと言われたら……ちょっと辛いだろうと思うのでやはり無理ですかね。

木村 厚夫 教頭先生

① 時代小説が好き。印象に残っている本は、山本周五郎の『栄花物語』。賄賂で有名な田沼意次が、先鋭的で優れた政治家として描かれ、ライバル松平定信と対決します。歴史の見方の多様さを教えてくれる一冊です。

② 教師以外でなりたかった職業は、プロ野球選手です。小さな頃から野球をやっていたので、憧れの職業です。なので、中学校の教師になって、野球部の監督を務め、3人の甲子園選手を育てることができたことは誇りです。

槇野 繁樹 先生 (理科)

① エドモンド・クーパー著の『アンドロイド』というSF小説が最も印象に残っています。今でこそ一般的であるAIですが、1960年代当時に、「あまりに高度かAIは、ヒトと区別できない」という命題を人とアンドロイドの恋愛という細い線から証明していくという、すごい内容です。現在は絶版になってしまったようですが、古本屋で見かけたら手に取って下さい。

② 戦闘機のパイロット

増田 誠也 先生 (国語)

① 大学生時代、サークルで最初に読まれた本が廣松渉の『世界の共同主観的存在構造』でした。2ページ読むのに3時間かかるという有り様で、鍛えられると同時に己の限界を思い知らされた一冊です。「青春の書」かな。

② 大学卒業が間近に迫っても将来の展望など何もなく、とりあえず幾つか新聞社を受験しました。朝日新聞だけは筆記を突破したのですが、志望動機の薄さを見抜かれ面接で落とされました。真面目にやるときゃよかったな…。

須藤 弘子 先生 (家庭)

① 印象に残った本、たくさんあってどの本にしようか迷いますが、厳選した2冊を紹介します。1冊目は原田マハの「ジベエルニーの食卓」まさに読む美術館。画家のアトリエにタイムスリップしてしまったかのようです。優しく美しい光を感じることができます。2冊目は司馬遼太郎さんと12人の対談集「日本人を考える」とても40年前とは思えない先見の明に驚きます。

② オペラ歌手。声や歌に興味があるから。

早川 尚人 先生 (社会)

① 米山伸郎『知立国家イスラエル』(文春図書)。今、彼の国はドローン、自動運転などの技術革命による「ものづくり」が目覚ましく、アメリカ資本注目の的である。それらのイノベーションの目的はずばり、「生存」と本書は説く。小国故に、若者の能力開花のためのシステムは軍事を中心に見事に一本化され、しかもビジネスとの連携発展にも躊躇はない。日本とは置かれた状況がまるで違うのだ。

② 外交官。治外法権を味わってみたいので。





星野 正樹 先生（英語）

- ① Bob Green の American Beat が印象に残っています。模試の長文で出題され、その平易な文体の中に強いメッセージがあり、原書を1冊読みたくなり、初めて洋書を買いました。その本が American Beat です。
- ② 参考書をつくっているZ会などの出版社に就職を考えたことがあります。自分でもお世話になったので、その恩返しをしたくて、少しでも受験生の役に立つ本を世に送り出し、勉学に励んでもらいたかったからです。

河野 善美 先生（理科）

- ① 『もしも月がなかったら ありえたかもしれない地球への10の旅』ニール・F・カミングス この本では、もしもの世界が論理的に記されています。もしも月がなかったら、自転速度がずっと速く、強風が絶えず荒れ狂い、高山も存在せず、生命の進化も遅い。内容は少し難しいかもしれませんが、地球の歴史や生命の進化を理解するのに役立つ本です。
- ② 計画も含めて旅行が好きなので、教師にならなかつたら旅行会社に勤めたかったです。

竹内 綾華 先生（英語）

- ① このジャーナルを高校生が読むとして一冊選ぶなら、森博嗣の『道なき未知』です。自分の価値観を絶対視することは、時に自分の首を絞めます。発想の転換1つで楽になれることもあります。別視点をくれるエッセイです。
- ② なりたかったと書く諦めている前提で嫌なのですが、教師以外でなりたいのは、コミュニケーションを研究する人です。理由は、自分が苦手とすることのしきみを明らかにして、よりよい人生を送りたいからです。

薄羽 明梨 先生（社会）

- ① 今まで読んだ本の中で印象に残っているものは、住野よる『君の臍臓を食べたい』（双葉社、2015年）です。内容はもちろん、個人的には主人公の名前の伏線と、その回収の仕方が好みでした。
- ② 教師以外でなりたかった職業は、中学生まで看護師になりたいと言っていた記憶があります。理由までは覚えてないのですが、血が苦手であることに、理科の授業を通して気づき、断念しました…。

柳橋 晃代 先生（英語）

- ① 『来年の年表』『来年の年表2』：河合雅司著：講談社現代新書 人口減少の日本で、我が国にこれから起こりうる事、自分自身に起こりうることを知り、危機感を持って生活していかなければならないと感じたからです。
- ② ピアノの先生でしょうか。私は小さい頃からピアノを弾くことが大好きでした。「音楽」は「音」を「楽しむ」と書きますね。ピアノに触れることが楽しくて楽しくて仕方がなかったことを思い出します。コンクールにも何度か出場しました。今でも時々弾いています。

篠崎 順子 先生（社会）

- ① 『それもお金で買いますか市場主義の限界』（マイケル・サンデル著）「お金で買えるもの」と「お金で買えないもの」の区別はどこにあるのか。著者は市場の道徳性を問題にすべきと主張しています。序章では、アメリカのお金で買えるものの事例が列挙されていて、この序章だけでも非常に面白く読めます。
- ② キャビン・アテンダント
世界を飛び回れるから。残念、背が…。

次号は、教育実習生の特集です。おすすめの本と、通っている大学の魅力を聞きました。
お楽しみに！

